

日野町地域おこし協力隊活動記



今年も2月10日から3月10日まで、日野ひなまつり紀行が開催されます。日野ひなまつり紀行は、日野まちかど感応館周辺の古い町並みや棧敷窓が残る一帯で、家々に雛人形や雛飾りが飾られ、その町並みの風情とともに散策を楽しんでいただけるイベントです。町の方が一体となって作る日野ならではの風景を、他府県からお越しの方がとても喜んでおられるのを3年間目の当たりにし、もっと日野町に住まれている方にも見に来ていただきたいなど感じています。

今年も近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」では、伝統料理を継承する会の提供するひな祭り御膳を
土日限定でご用意します(入館料込1,500円)。事前予約(食数のみ確保となります)もできますので、ぜひこの機会にふるさと館にもお立ち寄りください(予約専用電話090-8456-1809)。
2月末で地域おこし協力隊としての任期が終了となります。様々な機会をいただき、貴重な3年間となりました。本当にありがとうございました。任期中も日野町におりますので、引き続きよろしくお願いたします。



鵜瀬 ゆりさん



各団体などから隊員へ講演などを依頼される場合は、事前に役場商工観光課までお問い合わせください。隊員の活動は、日野町ホームページでも確認できます。

◆問い合わせ先 商工観光課 商工観光担当 ☎0748-52-6562

綿向雑感

— 2019年2月 —
日野町長 藤澤 直広

年末から綿向山はずつと雪化粧。静かに町を見守っているかのようにです。綿向神社の神様の使いがイノシシと言われているです。イノシシ年の初夢を乗せて500台を超える観光バスで初詣客が来られました。お正月という節目に「今年も頑張ろう」と決意を新たにすることはいいことです。

ところで、「平成最後の〇〇」とよく言われます。5月1日「改元」です。元号の最初は、飛鳥時代の「大化」だそうです。歴史の教科書には元号を使った出来事がでています。「大化の改新」は大化2年。鎌倉時代の蒙古襲来(文永の役)は文永11年、江戸時代の享保の改革は享保元年などです。改元は、疫病の蔓延や災害発生などを契機にも行われ、天皇の代替りに合わせてのみ行われるのは明治以降のことです。政治の舞台では、平安時代までは天皇制による政治が行われていましたが鎌倉時代から江戸時代末までは、武家による幕府が政治を行いました。明治

維新で薩長連合軍が「錦の御旗」を掲げ「官軍」となり討幕、中央集権国家に転換しました。明治憲法では「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」と神格化され、戦前は「現人神」とも言われました。戦後は、「天皇は、日本国の象徴」とされ、「人間宣言」が行われました。

ところで、年末の天皇誕生日の記者会見で「天皇陛下」が「日本国憲法の下で象徴と位置付けられた天皇の望ましい在り方を求め」、「沖繩の人々が耐え続けた犠牲に心を寄せていく」、「平成が戦争のない時代として終わろうとしていることに、心から安堵しています」などと話された言葉はとても意義深いと思います。戦前、戦中、戦後の時代を生きた先代の昭和天皇の姿を見てこられただけに平和や憲法の大切さが身に染みておられるのだと思います。

年明け早々、安倍首相が憲法の改正に「決意」を示すとともに沖繩県辺野古の海の埋め立てを続けています。元号は、昭和、平成から新元号に変わっても平和主義を掲げた戦後の歩みを真直ぐに進めるために力を合わせましょう。

温故知新

日野歴史探訪 はじまります

私たちの住む日野町には、52の大字があり、それぞれの地域が豊かな自然と歴史文化でいろどられています。

温故知新では、町内各大字の歴史と代表的な文化財をシリーズで紹介していきます。

大字中在寺

大字中在寺は日野町の北西部に位置し、その呼び名は周囲を川が取り囲む地形に由来していると言われています。

中世には、佐久良川中流域一体に広がっていた荘園の奥津保の一部でした。

江戸時代の領主は、幕府領、鳥羽藩土井氏・浜松藩松平氏などを経て、宮津藩本庄氏領で幕末を迎えています。中在寺会議所と滋賀大学経済学部附属史料館には、当時の村の様子を知りうる貴重な古文書約900点が残されています。

江戸時代中期の寛政年間には、埼玉県の秩父を中心に酒造業を営んだ近江日野商人・矢尾喜兵衛家を輩出しています。

明治時代以降は、西桜谷村役場が置かれるなど地域の中心地として栄えました。

光山寺の六道絵

寺院・神社としては、集落内の南端には真宗大谷派光山寺と浄土宗広照庵の二カ寺が、集落中央部には津島神社がそれぞれ位置しています。このうち、広照庵と津島神社には、正和元(1312)年・元応三(1321)年の銘をもつ宝篋印塔が伝わり、中世の信仰生活の豊かさを物語っています。また、集落西方には氏神である落神社が鎮座しています。なお、当村は北脇に鎮座する諸木神社の氏子域にも含まれており、四月に行われる春祭りでは両者の間を渡御行列が往還します。

数ある文化財のなかから、今回は光山寺に伝わる「六道絵」をご紹介します。

六道絵とは、平安時代の高僧・源信が著書『往生要集』のなかで

説いた死後の世界である六道(天道・人間道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道)を絵画化して描いたものです。現在、日本人の多くが抱く地獄のイメージは、この六道絵が起源であると言われています。

この六道絵の典型例として知られるのが、聖衆来迎寺(大津市)所蔵の15幅からなる作品で、国宝に指定されています。江戸時代、県内の諸寺院では聖衆来迎寺の六

道絵をもとにした写本が制作され、民衆教化のために利用されるようになりました。

光山寺所蔵の六道絵はこうした作品の代表的な事例で、苦しみと恐怖に満ちた地獄の情景が、繊細な筆致で凄惨に描かれています。作者は判明しませんが、裏書の内容から、文政5(1822)年から天保12(1841)年頃にかけて制作・奉納されたことがわかります。

また、本作品は永代経料として門徒から順次奉納されたようであり、施主は中在寺村在住の大橋助左衛門のほか、安部居村・仁正寺村・政所村の住人から奉納されています。

江戸時代の宗教絵画の秀作として、また当時の信仰生活の実態をうかがえる資料として、貴重な文化財とすることができそうです。



巻一 閻魔王宮図